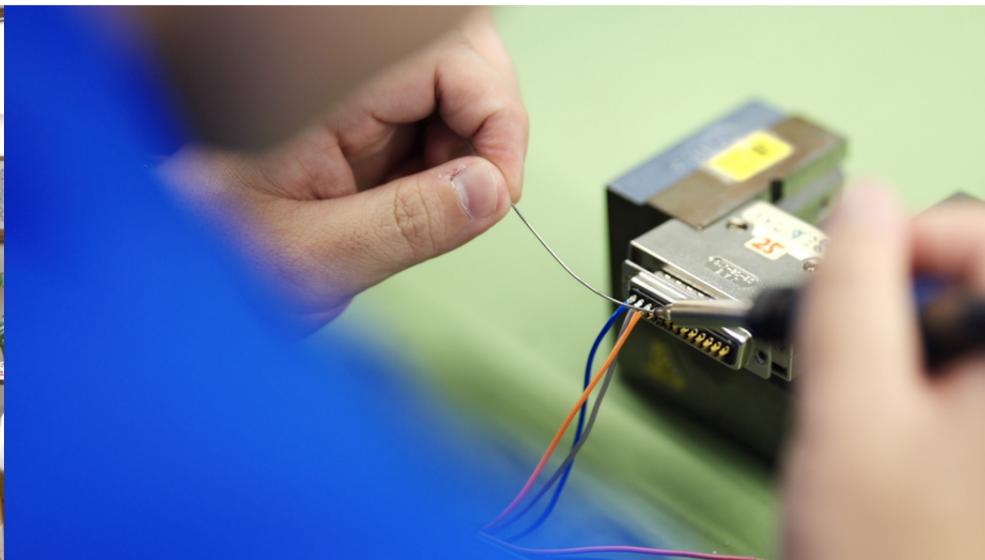


ふらっと

FLAT

「みんながいい感じで生きていく」を発信するマガジン



anlib株式会社
代表取締役

堀内 麻実
MAMI HORIUCHI

描くこと、つくることは、ただの作業ではなく、その人らしさが表れる時間。



アート作品に囲まれ、笑顔が輝く。ankoの「A」のポーズで1枚。「創作活動を通して利用者が前向きになれる瞬間に立ち会えるのがうれしい。」と代表の堀内さん（上段中央）。



アートは、誰かの居場所になる



ていった。軽作業中心の事業所は多い一方、創作活動にしっかりと取り組める場所は、ほとんどない。そこで、2年の準備期間を経て誕生したのが、就労支援事業所「anko」だ。ankoでは、軽作業に加え、絵画、マンガ、編み物、刺繍、グラフィックデザインなど、幅広い創作活動に取り組むことができる。

「一日中創作に没頭する人もいれば、午前は軽作業、午後は絵を描く人もいます。その日の体調や気分に合わせて選べる柔軟な環境にしています。」
活動が続ける中で、利用者の変化も感じているという。
「外に出られるようになって、笑顔が増えた方もいます。『美術館に行ってみよう』『写真に写ってみよう』と、前向きな気持ち芽生える瞬間に立ち会えるのがうれしいです。この仕事をやってきてよかったと感じますね。」

アートが生む、あたたかな循環

anlibでは、県内外の企業や病院に作品を貸し出す、「レンタルアート事業」も行っている。定



はじまりは、ロビーに飾られた作品だった

ドアを開けると、カラフルな絵画や刺繍、編み物など多彩な作品がずらりと並ぶ。ここは、anlib株式会社が運営する就労継続支援B型事業所「anko」だ。
anlib株式会社は、もともと紙媒体の企画編集やデザインを手掛けてきた会社。2024年の夏、代表の堀内麻実さんは新たに福祉事業を立ち上げた。
「地域福祉をテーマにフリーペーパーankoを発行しようと思ったのが始まりです。大きな出版社ではなかなか取り上げにくいテーマも、私たちのような小さな会社だからこそできることがあると思っただけです。」
取材先の高齢者施設や障害者施設へ通う中で、堀内さんはあることに気づく。ロビーに利用者の作品が飾られていることは多い。けれど、その多くは、施設の外に出ることがなかった。

「クオリティの高い作品もたくさんあるのに、人の目に触れる機会がとて少ないと知りました。福祉の世界を、もっとカジュアルに知るきっかけがあってもいい。そう思ったことから、アートに関心を持つようになりました。」

創作に向き合える場所をつくる

活動が続けるなかで、作家から悩みを打ち明けられることも増え

「福祉の世界を初めて知ったとき、本当に衝撃を受けました。大げさではなく、もうひとつの世界があったんです。自分の知っている山梨とは、違う風景がそこにありました。」
その気づきは、もの見え方を大きく変えるきっかけになったという。今では、地域や企業の人々がこの活動を支え、輪が少しずつ広がっている。

「ここを卒業して、社会で活躍する人を増やしていけたら。アートはあくまできっかけです。特技を生かして自立していける人を、一人でも多く送り出したい。」
優しく微笑む堀内さんの周りには、自然と笑顔が集まってくる。地域と福祉をアートの力でつなぐ、あたらしい世界のカタチがここから生まれている。

More Details



1 就労継続支援B型事業所「anko」代表の堀内麻実さん。2 作品は一つひとつ時間をかけて丁寧に作る。3 得意分野を活かして自分を表現する。4 この日は午前中から創作に没頭。5 就労継続支援B型事業所「anko」。ここから日々の創作が始まる。6 全員で作上げた作品。ankoを中心にそれぞれの個性が光る。



2



3

1. 2025年10月に行われた「ブレイキン祭り」にて、多くのギャラリーが会場に駆けつけた。2. 「バトル」にて、自らの身体で最大限の表現をする参加者。3. アクロバットな技がブレイキンの魅力のひとつ。4. レッスンにて、子どもたちを見守るユエンさん。5. レッスンに通う子どもたちと。ファッションにも個性が溢れる。



1

みんな違うから、おもしろい

性格も、もともとみんな違う。どうやって自分を活かせるか、どう表現できるか。それがブレイキンのおもしろさなんです。」
年齢、性別、国籍を超えてバトルしあうこともあるし、耳が聞こえない人や片足がないという人が勝つこともあるという。そこに特別扱いはない。それぞれがひとりのダンサーだ。
技を競うスポーツでありながら、個性がそのまま強みになる。そこそがブレイキンの魅力なのだろう。

だからブレイキンってかっこいい！

遠藤さんは、子どもたちに伝えたい想いがある。「世界に行ってもいいし、行かなくてもいい。ブレイキンで身につけた感覚は、どんな生き方にもつながるから。」
自己表現力、達成感、出会い。ダンスを通して、あたらしい自分

自身の発見がきつとある。ブレイキンは生き方そのものと言えるだろう。
ダンスを知らない人でも見て楽しめるのが、ブレイキンの良さ。「この人かっこいい！」「なんでこんなに回れるの？」と、推しを見つけるような気持ちで見ると、ひとつ。ファッションやスタイルに人間性が出るから、そこがいい。

山梨をブレイキンの聖地に

「ブレイキンといえば山梨、そう言われる場所にしたいですね。」
2024年、2025年と続けて開かれた「山梨ブレイキン祭り」には、県内外から多くの人が集まった。子どももベテランもステージに立ち、技をぶつけ合い、終わればたたえ合った。
山梨のブレイキンはこれからはもっとおもしろくなる。
そんな未来を、遠藤さんは静かに思い描いている。



「ブレイキンってほんとに自由なんです。」そう熱く語るユエンさん。優しい表情で子どもたちを見守る。その目は、かつての自らを見ているかのよう。

ブレイキン
ダンサー

UEN
ユエン

ブレイキンとともに生きる

遠藤雄介さん（ダンサー名ユエン）とブレイキンの出会いは、偶然見たテレビ番組だった。大学生になり本格的に踊り始めたが、教えてくれる人は周りにいなかった。
「原点は甲府駅北口の広場。借りてきたビデオをすり切れるほど見て、仲間と技をシェアして、ひたすら踊りました。」
やがてバトルやコンテストに出るようになり、「このまま続けていけたら」という気持ちがあったが、当時はまだダンスで食べていく選択はなかった。
卒業して一般企業で働いていた頃、突然ダンス仲間の訃報が届く。やりたいたいことをやる。

仕事を辞め、シアトルへ渡り、ダンスの道に専念していった。帰国後はスポーツクラブに入社。ダンスのインストラクターをやりながら、身体の動かし方や筋肉の仕組みを学んだ。フィジカルも理解することで、表現の幅はさらに広がっていった。

2011年に独立。今はブレイキンを広めながら、子どもたちへダンスやヨガを教える日々を送っている。

個性がそのまま強みになる

「性別も体重も、手足の長さも



4

More Details





株式会社ササキ
代表取締役
佐々木 啓二
KEIJI SASAKI

フラットで明るく誰もが働きやすい環境が整った職場。

製造業 × 技術の伝承、働きやすい職場環境

ときには資格取得の練習をし、ときには人生相談を受けることもある。道場には、世代を超えた温かな空気が流れている。

従来の工場つばさを一新

ガラス張りの大きな窓からは、富士山や甲斐駒ヶ岳といった山々が一望できる。工場には、壁もなければ、時計も区画線も張り紙もない。ひと目でわかるピクトグラムを採用し、ユニバーサルデザインが目を引く。

「昔ながらの工場つばさをなくしたかった。」と佐々木さん。障害の有無や国籍の違いを超えて、誰もが自然に受け入れられる。そんな空気が、この工場にはある。明るく広々とした社内は、物理的な段差だけでなく、人の心の段差もなくしている。

明日も行きたいと思える会社に

ケーブルや重い部品は、自動倉庫に格納され、在庫管理システムの導入によって、年齢や性別に関係なく、誰もが作業できる環境が整っている。

工場内では女性の活躍が目立つ。社員の半数以上が女性で、子育て中の社員も多い。育休・産休からの復帰率は100%になるという。

「女性が働きやすい環境はもちろんです。誰もが働きやすい会社に行きたいんです。明日も会社に行きたい、と思ってもらえる場所です。」

ありたいですね。」

柔らかい口調の中に、強い信念が感じられた。

未来へつなぐ循環がうまれる環境

「図面どおりに仕上げ、納期を守る。そういった当たり前を当たり前にできる、強い会社を目指しています。技術者が誰であっても高品質な製品を生み出せる。それが会社の技術力だと思っんです。」佐々木さんの言葉には誇りがにじむ。

技を受け継ぐことで人が育ち、人が育つことで技も磨かれる。その循環が、ササキという会社を支えている。

「能力を発揮できる人が輝ける会社でありたい。そして『ササキに任せておけば大丈夫』と、お客様に言ってもらえる会社を目指したいですね。」

フラットで明るく誰もが働きやすい環境が整った職場。ササキは今日も技を受け継ぎ、未来へつないでいく。



株式会社ササキの「道場」は、ベテラン社員である範師・石川さん(右)から若手社員へ技術を伝承する場所。工具の取り扱いや手の感覚を学ぶ。

1_ オープンな明るい個室は話が弾む。2_ 最新鋭のマシンが揃う本格的なジムも完備。3_ ササキキッチンの本棚には重慶市出身の大村智博士や宇宙関連の書籍が並ぶ。4_ 佐々木社長。5_ ササキキッチンは食事や休憩、ミーティングにも使われる社員の人気スポット。



More Details



北杜市の想いを抱き、山梨から世界へ

素朴屋株式会社
代表取締役
今井 久志
HISASHI IMAI

点と点をつなげて、
より大きなグローバルな会社に。



上_素朴屋株式会社代表の今井久志さん。「日本人じゃなければいけないという制限を外せば、優秀な人材を獲得できる可能性が広がるんですよ。」と話す。下_お互い学び合い、信頼関係が生まれる。

世界の拠点を結び、
山梨の工務店

山梨県北杜市にある「素朴屋株式会社」。
八ヶ岳の木材と伝統工法にこだわり、設計から施工まで手掛ける工務店だ。
今では山梨を中心に、東京、ハノイ、ドバイに拠点が広がり、ホーチミンにはショールームもオープンした。
創業当初から海外を目指した会社のように思えるが、その一歩は意外なところから始まった。

「おもしろそう」が原動力。
グローバル展開へ

「人がバタバタと辞めてしまっただんです。」
そう笑いながら振り返るのは、代表の今井久志さん。悩む中でふと「海外に事務所があったら、おもしろくなるかもしれない」という考えが浮かんだという。
今井さんは若い頃から海外が好きで、色々な国を放浪して、一時はカナダに住んだこともあった。しかし、創業当初は自分が海外展開をするなど夢にも思わなかった。
転機は以前家族で訪れた、ハノイ旅行だった。街には若さと勢いが満ちていて「ここはおもしろい。」と直感したという。
海外に会社をつくるために、何から始めたらいいのかもわからなかったが、ジェトロ山梨に相談すると、話は一気に動き出した。



1_スタッフと笑う今井社長。2_SNSを通じて世界中から求職者の問い合わせが来る。3_本社敷地内で営業するベトナム料理店。シェフはベトナム人社員。4_多様なバックグラウンドを持つ人材が働く。

外国人向けの企業説明会や専門学校訪問など、採用に特化したサポートを受けながら、2021年春、初めて外国籍スタッフを迎え入れた。
「当時は、大工になりたい、工務店で働きたい、という日本人は少なかつたんです。暑いし寒いし重労働だし。でも外国人に私たちの会社の話をすると、興味を持ってくれたんです。国籍にこだわりはありません。」
今井さんは淡々と言うが、スタッフの顔ぶれはじつに豊かだ。
ベトナム、タイ、フランス。東京事務所のマネージャーはコンゴ育ちのベルギー人女性。ハノイ事務所も地元出身の女性が率いている。管理職の半分は女性だ。
「男だから、女だから、日本人だから、外国人だから。そんな線引きは意味がないんです。力のある人に、責任ある仕事を任せる。それだけのことです。」

山梨の工務店が世界へ。



異なる背景を持つ人が集まる組織がゆえに、大切にしていることがある。
それは、言葉にして伝えること。
「思っていることは、ちゃんと口に出す。わかってくれるはず、は通用しませんから。必要なら英語も使います。」
日本人はときに曖昧な表現をする。遠慮も多い。思っていることを言わず、突然辞めてしまうケースもあった。だからこそ、丁寧に話することを心掛けている。

地域と世界をつなぐ「恩返し」

海外展開について尋ねると、今井さんは柔らかくほほえむ。
「ベトナムやドバイに進出したのは出稼ぎなんです。海外で利益が出たら山梨に還元したい、という想いが強いんです。私自身、北杜市に移住して約20年、子どもも4人育ててもらって、会社も同様に育ててもらっている。だから、恩返しをしたいんですよ。」
グローバルな展開を進めながらも、北杜市への深い想いも同時にある。

山梨の工務店が世界へ。
素朴屋は今日もまた、新しい世界への扉を開いている。



2_ SNSを通じて世界中から求職者の問い合わせが来る。3_ 本社敷地内で営業するベトナム料理店。シェフはベトナム人社員。4_ 多様なバックグラウンドを持つ人材が働く。

More Details



黒平・能三番が選んだ継承のかたち

黒平の能三番
伝統芸能
鼓役
成澤 治子
HARUKO NARUSAWA

黒平の山から生まれ、何世代もつないできた舞。



甲府市に800年以上
伝わる「黒平の能三番」

甲府市役所ではたらく成澤治子さんが「黒平（くろべら）の能三番（のうさんば）」と出会ったのは、こうふ開府500年を記念したイベントの準備がきっかけだった。甲府市に800年以上も続く伝承芸能があることに衝撃を受けた。

黒平は、甲府市の最北端にある集落。

昇仙峡を抜け、荒川ダムを越え、さらに山道を車で約30分。

その山間の集落には、鼓や笛のお囃子に合わせ、翁（おきな）、黒木尉（くろきじょう）、千歳（せんざい）の三役が舞う、儀式的祝言曲が伝承されている。

御岳信仰とともに歩んできた能三番は、婚礼や新築などの祝い事があつたとき、お祝いの口上とともに捧げられる。

「舞手に神が宿り、村を祝福し、邪気をはらうという神聖な舞なんです。」

成澤さんは次第にその奥深さに引き込まれていった。

能三番の鼓を担当する

令和元年5月、金櫻神社で開催された金櫻例大祭で、成澤さんは初めて鼓を打つことになる。

「まさか、自分が演奏する側になるなんて思っていませんでした。緊張しましたが、正直、務まるのかという不安のほうが大きかったです。」



4
メイン上_「山梨県民の日 記念行事」で能三番を執り行った全員での1枚。メイン右下_鼓役を全うする成澤さん。メイン左下_下黒平能三番保存会の藤原さん。1_ 演舞の様子。能三番をひと目見ようと会場には多くの人で賑わった。2・3・4_ 様々な衣装やお面を着け、演技が行われる。5_ 出演前、衣装の仕上げをしてもらう成澤さん。

バトンを受け取り、
そしてつなぐ

この日は、山梨県民の日記念行事。

その舞台で舞う、黒平の能三番。

太鼓や鼓、笛のお囃子とともに、面をつけた翁、黒木尉が演舞する。

黒平に伝わるリズムと掛け声が、秋空に広く響きわたっていた。

黒平の山から生まれ、何世代もつないできた舞。

今そのバトンは、時代とともに形を変えながら、また次の人へと届けられようとしている。

その日は、色々な偶然が重なり、鼓の担当が欠員してしまっていた。保存会リーダーより声がかかり、急遽成澤さんが出演した。

カタチを変え、
想いを引き継ぐ

能三番には古くから守られてきた決まりごとがあった。黒平出身であること、長男であること、男性であること。そして師から口伝で学ぶこと。

一方、黒平の集落は高齢化と人口減少が進み、今では数世帯ほどにまで減少している。この伝統芸能を絶やさないためには、時代と共に形を変えていく必要があった。成澤さんは黒平の出身ではない女性でもある。

自身に加わることに葛藤があった。

「黒平の地に足を運び、金櫻神社や上黒平の黒戸奈（くろと）神社、下黒平の大山祇（おおやまづみ）神社といった地域に紐づいている神社にお参りをして、私が関わっていくことを神様にお伝えしました。黒平の歴史や由来を学ぶこと

人々の暮らしとともに継承されてきた証



More Details



特定非営利活動法人
ジョブクリエイター
理事長
横地 翼
TSUBASA YOKOCHI

自分の力でできた、という気持ちを積み重ねていける場所に。

「瞬間瞬間を
全員で分かち合う」

南アルプス市の畑の中に、にぎやかな笑い声が響く。「ここはみんなの職場です。」と語るのは、特定非営利活動法人ジョブクリエイター理事長・横地翼さん。

この「ジョブスペースかけはし」では、障害のある人たちが畑仕事や木工などのものづくりを通じて、自分の力を発揮している。「この地域は耕作放棄地が多く、使われていない畑をお借りしています。障害のある方たちと一緒に農産物を育てていこうと思ったのが始まりでした。」

いまは12名のメンバーが在籍し、季節の野菜のほか、甲府の伝統野菜長禅寺菜など、珍しい野菜も栽培している。

畑での作業は工程も多い。土を耕すところから始まり、肥料を撒いて、トラクターでかき混ぜ、マルチを張り、ネットを張る。「自分たちで蒔いた種から芽が出る瞬間がうれしい。みんながよろこびを分かち合いながら作業しています。」

季節とともに変化する
作業

横地さんは愛知県出身。前理事長の久保川さんに誘われ、山梨に移住してきた。



努力が生活のうれしさに変わる

「支援をするには、まず関係性づくりが重要です。ここでは、農経験のある利用者さんから教えてもらうことも多く、自然とコミュニケーションがうまれていきました。」

山梨の夏は暑く、炎天下での作業は簡単ではない。30分ごとの水分補給、こまめな休憩。

それでも、みんな太陽の下に出るのを楽しみにしている。

「室内作業が苦手な人も多いです。外の空気を吸いながら身体が動かせるのは、それだけで気持ちがいい。夏は大変だけど、やっぱり畑が好きなんですよね。」

冬にはハウス栽培や、ぶどう農家からの依頼でぶどう用の傘の洗浄、枝の回収なども行う。

屋内では木工や食品加工も。山梨県産材やFSC認証材を使って、自治体のノベルティや木製の賞状を制作している。

野菜を収穫、そして販売へ

収穫した野菜は、マルシェやJA直売所などで販売される。マルシェでは常連客も多く、「また買いに来たよ。」と声をかけられることもある。

未来へつながる、
かけはしを

活動の先にあるのは、利用者それぞれ次のステップだ。

「ここを卒業して、農業法人やA型事業所、一般企業で働けるようになったら本当にうれしい。そのためにも、技術や知識を少しずつ積み上げていけるようにしていきます。」

横地さんは笑う。「障害があるからこれは無理、なんて決めつけずに、いろんなことに挑戦してもらいたい。自分の力でできた、という気持ちを積み重ねていける場所になりたいですね。」

晴れ渡る空のもと、今日も笑顔が咲いている。未来へつながる「かけはし」とともに。



メイン _ 声を掛け合いながら作業する。1_ ジョブスペースかけはしのメンバー。協力しながら個々の力を発揮している。2_ 「太陽の下での農作業は大変なこともあるけれど、やっぱり畑が好きなんですよね。」理事長の横地さんは、未来へつながる場所にしたいと語る。3_ 大切に育てられた赤いオクラ。4_ 一つひとつ丁寧にノベルティ作成をするスタッフ。5_ 夏場の暑い時期にもかかわらずスタッフもハツラツと作業をしていた。



More Details



春日居町から、世界へひらく英語教室

普通に話しかけてもらえる。それが一番嬉しい。

ほめて伸ばす
自己肯定感が育つ教室

スピークイージーには、2歳から80代まで、幅広い年代の生徒が通う。

目的もさまざま。小さな子どもたちにとって、外国人の先生と触れ合うことは、特別なことではなく当たり前となっている。年配の生徒は「海外には行けないけれど、ここに来れば世界に会える」と楽しそうに話す。30年以上通い続ける人もいるという。

この教室の特徴は、英語教室でありながら、英語だけを教える場所ではないことだ。

発表会では、子どもたちが自ら手を挙げ、一人でステージに立つこともある。緊張しながらマイクを握り、自分の言葉で話す。その姿に、知花さんは毎年涙が出るという。

「不登校だった子が、『ここなら来られる』と言ってくれたことがありました。理由を聞いたら、『ここに来ると自分のことが好きになれるから』って。私たちのつくってきた教室が、誰かの力になっているんだと感じました。」

春日居町に
外国人が住むということ

今でこそ笑顔が絶えない2人だが、この地域で国際結婚をした当初は、戸惑いや衝突もあったという。外国人というだけで、不審がられることや、住まいを借りることすら難しいこともあった。



スピークイージー外国語学校を運営するおふたり。運営を引き継いでから約30年。ここ最近では外国人を取り巻く環境が大きく変わったことを教えてくれた。ウィルフレッドコペッチさん(写真左) 前田知花さん(写真右)

国籍の違いを
特別にしないために

ハロウィンやクリスマスには、地域を巻き込んだイベントも行っている。

近くの美容院やスーパー、保育園と一緒に仮装を楽しみ、キャンディーを配る。かつては警察が来たこともあったイベントが、今では地域の恒例行事になり、家を飾って迎えてくれる人もいる。

外国人講師を雇う際も、文化や働き方の違いから、すれ違いが生じることは少なからなかった。それでも、話し合いを重ね、時間をかけて関係を築いてきた。

「今は、国籍で見られることはほとんどなくなりました。普通に話しかけてもらえる。それが一番うれしいですね。」

特別扱いしないでいい。ただ、一緒にいるのが当たり前な世の中になればいいですね。」と知花さんは言う。

英語を学ぶことは、世界を見る窓をひとつ増やすこと。ここで育った子どもたちが、外へ出て、また戻ってきて、次の誰かにつないでいく。そんな循環を、2人は前向きに願っている。

春日居町から、世界へ。

スピークイージー外国語学校は今日も、笑顔とことばが行き交う場所であり続けている。



26歳、結婚と同時に
スクールの経営へ

神社の境内に、子どもたちの笑い声が響く。

山梨県笛吹市春日居町。ここにある「スピークイージー外国語学校」は、英語を学ぶ場であると同時に、人と人が自然につながる場所でもある。

運営するのは、前田(コペッチ)知花さん。この土地で生まれ育ち、東京の大学を経てアメリカへ留学。山梨に戻り、学生時代からアルバイトをしていた英会話スクールに就職した。その後、職場で出会ったカナダ人のウィルフレッド・コペッチさんと結婚。思いがけない流れで、スクールの営業権を引き継ぐことになる。

「経営のことなんて何もわからないまま、引き継ぎもなくスタートしました。」と知花さんは笑って振り返る。

それでも、目の前のことに全力で向き合いながら、気づけば25年。子育てをしながら、経営、通訳、翻訳、学校での英語指導、地域講座やイベント運営まで、できることを一つずつ積み重ねてきた。

校長を務めるウィルさんも、長年このスクールで教えてきた一人だ。



1_ 老若男女問わずさまざまな人がスクールへ通う。2_ テキストをもとに、生きた英語を学んでいた。3_ 「まちがえたっていいじゃない。」4_ 視覚的に英語脳を鍛えていた。5_ ネイティブスピーカーの先生が多数在籍する。6_ 子どもたちの1枚。国際感覚を身につけて世界へ羽ばたいてゆけ。

More Details



若い世代が「やってみたい」と思える仕事に

「ベトナムに日本のジュエリーを作っている工場が多いと聞き、オンラインで見せてもらったんです。作業の様子は日本人とあまり変わらなかったのですが、技能実習生として受け入れることにしたのが始まりです。」

「とはいえ、最初は不安の方が大きかった。言葉や文化の違い、日本特有の高い品質基準。しかしその不安は、すぐに解消されることとなる。」

「皆さん、来る前から日本語のあいさつや生活習慣を勉強してきていて。仕事も驚くほど器用で真面目なんです。日本のジュエリーに不慣れな対応してくれました。」

現在、従業員15名のうち6名が外国籍だ。

研磨、石留め、営業事務まで、それぞれが役割を担い、現場を支えている。

採用前の不安はすつと消えていった

「日本のやり方、ベトナムのやり方を教え合いながら、いいところを取り入れていった。それが、会社の財産になっています。」

結果として、デザインの幅が広がり、生産性も向上。短い納期にも対応できるようになり、顧客からの信頼も一層厚くなった。

小林さんは仕事だけでなく、生活の面でも寄り添う。ゴミの出し方や、引越時の挨拶の仕方を教えることもある。

「私はつなぎ役ではないんです。あとは彼ら自身が山梨の暮らしに自然と溶け込んでいったんですよ。」

近所との関係は、小林さんの手を離れて育まれることもあった。自分たちで育てた空心菜やパクチーをおすそ分けし、代わりに柿をもらう。

「パクチーありがとうね。」と近所の方から声をかけられたとき、採用前の不安はすつと消えていった。

宝飾産業のひとつの道

「今は転換期だと思っています。」



マノエが照らす、あたらしい道

株式会社マノエ
代表取締役

小林 弘文
HIROFUMI KOBAYASHI

国籍や背景に関係なく、意欲ある人が力を発揮できる環境をつくりたい。

ジュエリーの美しさに魅了された

山梨県は、国内有数のジュエリー産地として知られている。原料の調達から加工、流通まで、ジュエリーづくりのあらゆる工程を担う、世界的にも珍しい集積産地でもある。

株式会社マノエは、山梨県甲府市に工房を置く宝飾メーカー。国内ブランドのOEMを手掛け、精密さが求められる繊細な作業と、仕上りの美しさが高く評価されている。その確かな技術で、信頼を積み重ねてきた。

代表の小林弘文さんがジュエリーの世界に惹かれた原点は、少年時代にある。

「幼いころからプラモデルやラジコンを組み立てるのが好きでした。父の知り合いのジュエリー工房を訪れたとき、その美しさと精密さにもすごく魅了されたんです。」

20歳で業界に入り、職人として腕を磨き上げてきた。2013年、株式会社マノエを設立した。

外国人職人を受け入れることに

数年前からマノエは外国人職人の採用に踏み切った。背景にあったのは、業界全体で進む職人不足だ。

メイン上_国籍や背景を超え、一つのチームとしてジュエリー制作に励むマノエのスタッフ。メイン右下_高度な集中力が要求される繊細な作業にも丁寧に取り組む。メイン左下_社員一人ひとりの信頼は厚い。1_熟練の技術が求められる工程も多い。2_品質の高いジュエリーを作る。3_株式会社マノエ代表の小林弘文さんは「外国人職人の採用は不安もありましたが、今では踏み切って良かったです。彼らは驚くほど器用で真面目に仕事をしてくれます。」と話す。4_ミリ単位以下の細かい作業を経て作品が完成する。5_作品作りを支える道具も多種多様だ。



More Details



小菅村で醸す、クラフトビールという文化

Far Yeast Brewing
株式会社
代表取締役
山田 司朗
SHIRO YAMADA

地域を含めたコミュニティと
なっていけたら。

地域に根付くブルワリー を自分の手でつくる

東京から車で約2時間の場所に位置する、山梨県小菅村。人口700人ほどのこの小さな村に、世界27カ国へとビールを送り出すブルワリー「Far Yeast Brewing 株式会社」がある。

定番商品だけでも7種類。さらに、山梨の桃やぶどう、スモモなど旬のフルーツを使った季節限定ビールを含めると、年間で生み出すビールは数十種類にもなる。

代表の山田司朗さんがクラフトビールの世界に飛び込んだのは、ヨーロッパに滞在していたときだ。ふらりと立ち寄った小さなブルワリーで飲んだビールが、忘れられなかったという。「ビールって、大きな工場でつくられるものだと思っていたんです。地域に根付く小さなブルワリーの存在に驚きました。」

やがて山田さんは、自分でもつくりたいと思うようになった。

小菅村に醸造所が誕生！

Far Yeast Brewing がビール造りを始めたのは2011年。当初は自社の醸造設備を持たず、東京のオフィスからスタートした。

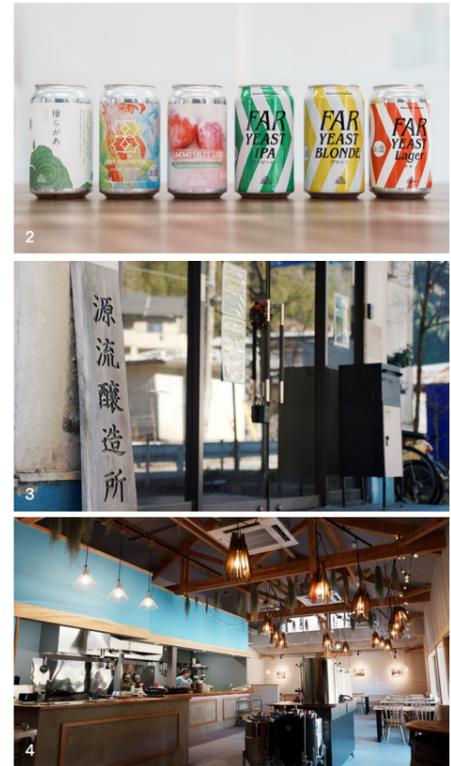
2017年、山梨県小菅村に本格的な醸造所を構えることとなる。東京からも比較的近く、水のきれいな山梨県は、創業者の出身



Far Yeast Brewing 株式会社 代表の山田さん。小菅村から世界へ、クラフトビールの新たな価値を届ける。



子どもから大人まで誰もが楽しめる場所に



地でもあった。場所を探していたとき、山梨県庁から小菅村の空き工場を紹介された。

「使われていない工場を活かせるならと、地元の方も歓迎してくれました。」

こうして、小菅村にブルワリーが誕生した。

山梨×ビール 地域資源を活用した ビール造り

クラフトビールのおもしろさは、味わいや種類の多さだけではないという。

「クラフトビールには、一杯ごとに背景があります。水、原材料、気候、さらに人の関わりが重なり合ってビールになる。それを感じられるからおもしろいんですよ。」

取り組みのひとつが「Brewed with YAMANASHI」だ。

農家とともに、山梨の果実を使ったビールをつくるプロジェクト。最初は桃から始まった。傷がついて市場に出せない桃を活用し、山梨市の桃農家とともに商品化。

「山梨の農家さんと一緒につくったビールが、この小菅から全国へ、そして世界へ広がっていく。ビールを通して、山梨の魅力をお届けできることにやりがいを感じますね。」

時として、山田社長やスタッフも畑に入り、収穫作業を手伝うこともある。

桃、ぶどう、スモモ、米、大麦など、さまざまな県産素材がビールへと姿を変えている。

ビールも人も多様だから

こそ新しいものが生まれる

現在、働くスタッフの多くは移住者だ。

このビールが好きで、移り住むスタッフも少なくない。外国人スタッフも、ベトナム、ネパール、過去にはアメリカやニュージーランド、台湾など、多国籍にわたる。人手不足はこの村でも深刻だが、同時に新しい力が必要とされる場所でもある。

「結局は人と人です。丁寧なコミュニケーションを心がけています。」

さまざまな背景を持つ人達の集まりから生まれるクラフトビールは、小菅の自然とあいまって、より味わい深いビールへと変化していく。

人と人をつなぐ クラフトビール

2025年11月、「道の駅こすげ」の隣地エリアに「The Far Yeast Beer Adventure」がオープンした。ビールの原材料である大麦やホップを、周囲の畑で収穫し、

仕込み、一杯のビールになるまでを体験できる。

「好きなビールを自分で注ぎ、そこでコミュニケーションがうまれる。ビール好きな人だけでなく、子どもから大人まで誰もが楽しめる場所にしたんです。地域を含めたコミュニティとなっていくといいですね。」

100%山梨産のビールの醸造も始まった。

「これ好き」「これはちょっと苦手」って、素直に言い合えるのもクラフトビールのいいところ。好みを探る過程そのものが楽しいんですよ。」

一杯のビールをきっかけに会話が生まれ、互いを受け止める時間が流れる。

小さな村に新しい施設が加わったことで、山梨のビールの楽しみ方はさらに豊かになっていく。



1_ 上空から見下ろした小菅村 2_ 個性豊かなラインナップ。右からラガー、ブロンド、IPA、そして地元食材を活かしたビール。3_ 多摩川源流の豊かな水でビールはつくられる。4_ 2025年11月オープンした「THE FAR YEAST Beer Adventure」。5_ 国内外で数々の賞を受賞。

More Details



ふらっと

FLAT

「みんながいい感じで生きていく」を発信するマガジン

FLAT 発行 2026年 3月

山梨県（やまなし共生社会推進プレイヤーズ事務局）

〒400-8501 甲府市丸の内1-6-1

TEL : 055-223-1358 E-mail : tayousei@pref.yamanashi.lg.jp

For More Information

